

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Cultural History : Fish Trapping in Micronesia with Special Reference to Fishing Devices and Fish Ecology

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 秋道, 智彌 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003738

ミクロネシアの筌漁

——漁具・漁法の生態学的研究——

秋 道 智 彌*

- | | |
|---------------------|----------------|
| I. はじめに | 1. 筌漁具の分布 |
| 1. 漁具研究の過渡期 | 2. 筌漁具の形態と材質 |
| 2. 筌漁の体系的研究の必要性 | IV. 筌漁の生態学 |
| 3. 筌漁の文化的意義 | 1. 筌漁の季節性と民俗知識 |
| II. サタウル島における漁撈と筌漁 | 2. 筌漁の魚種・漁獲尾数 |
| 1. サタウル島の漁撈 | 3. 筌漁の対象特異性 |
| 2. サタウル島における筌漁の概要 | V. まとめと今後の課題 |
| III. ミクロネシアの筌漁とその分布 | |

I. は じ め に

本論は、ミクロネシアの筌漁に関する比較生態学的研究である。本論ではサタウル島の調査を通じてえられた知見をもとに、まずミクロネシアにおける筌漁の分布をあきらかにしたい。そしてつぎに、筌漁に関与する生態学的な要因を指摘する。以上のことから、ミクロネシアにおける筌漁の全体像をあきらかにし、周辺地域との関連性や今後の問題点を指摘したい。

なぜ、筌漁をとりあげるのか。この点について予備的な考察をくわえておこう。

1. 漁具研究の過渡期

いうまでもなく、漁具はオセアニアにおける漁撈技術の研究にとり重要な対象である。なかでも釣りばりは、遺物として多く発見され、地域的な分布もひろい。その型式の分布・年代関係の研究は、オセアニアの人びとによる海洋環境への適応過程や民族移動の歴史をしるうえで重要とされてきた [ANELL 1955; REINMAN 1967; GREEN 1976]。

* 国立民族学博物館第1研究部

ところが、骨や貝製の漁具は比較的よくのこるが、植物性の材料や部分は、よほど条件がよくても遺物としてのこらないことがある。そのため、木製の釣りばりややす、網、筥といったものは、考古学の分野でかならずしも系統的にとりあげることができない。最近では、以上のような点をおぎなう意味でも、民族考古学的なアプローチによる研究がおこなわれており [KIRCH and DYE 1979; ANDERSON 1986; 近森 1988]、民族学的な情報のもつ意味が重視されてきた。

しかし、研究の対象となる漁撈技術自体が、現在、急速に消滅ないし変化を遂げつつあることも事実である。たとえば、ミクロネシア各地では、貝やベッコウ製の釣りばりにかわって、プラスチック製、金属製の釣りばりが圧倒的に多くもちいられている。釣り糸の材料もココヤシやハイビスカスの繊維製のものからナイロンへとかわってしまった。日本では筥漁具の材料でさえ、竹や籐といった植物性のものにかわり金属やプラスチックがふえつつある。パラオ諸島などでは、伝統的な木の材料と工業製品のワイヤーを組みあわせた筥がすでに使われているという報告がある [JOHANNES 1978: 29]。トラック諸島では、1950年代、すでに筥漁がほとんどおこなわれなくなっていた [LEBAR 1964]。こうしたなかで、中央カロリン諸島にあるラモトレック環礁、サタウル島、プルワット環礁などのサンゴ礁島では、植物性の材料でつくられたさまざまな種類の筥をもちいた漁撈活動が現在でもおこなわれている。

2. 筥漁の体系的研究の必要性

サンゴ礁海域における漁撈のうち、釣り漁や釣りばりについては、比較的よく調査されているが、筥についてはまとまった報告がない。筥は世界中にひろく分布する漁具であるが、オセアニア地域では、棘のある筥や魚伏籠についての分布を Anell が報告しているにすぎない。しかも、これらのいずれについてもミクロネシア、ポリネシアにはまったく民族誌的報告例はない [ANELL 1955: 4-17]。ぎゃくにそれ以外の筥については、ドイツの探検隊によるいくつかの報告がある [MÜLLER 1917; KRÄMER 1926, 1935]。しかし、かれらは漁具の記述に終始し、対象魚種や漁法の季節性といった漁撈生態学的な問題にあまり言及していないし、ミクロネシア全体を視野にいれて分布や地域差を分析しているわけでもない。

3. 筥漁の文化的意義

筥漁は、カロリン諸島一帯にひろく分布する *Fiyongon Panuwnap*、すなわち「偉大なる航海者」に関する民話のなかでもとくに取りあげられている。その民話のなかに

あるように、偉大なる航海者のすんでいたのが、トラック諸島のウマン島である。このウマン (Uman) 島の現地語名が、「筌の流れ着いた島」という意味の *Wuumaan* であり、そのことを語る別の民話もしられている [須藤・SAUCHOMAL 1981: 639-766]。

以上の諸点を考慮すれば、筌漁についての考察をふかめることは、海洋とのかかわりあいを深くもってきたミクロネシアの民族文化、とくに漁撈の研究において重要な意義をもつといえる。しかもそのためには、現在および近い過去における民族学的な調査および資料の検討がもっとも有効かつ重要なアプローチであるといえるだろう。

私は以下の節で、サタワル島においておこなった調査にもとづき、ミクロネシアにおける筌漁に光をあててみたい。なお、本報告でとりあげる野外調査資料は、昭和54年度文部省科学研究費補助金（現地調査）により、サタワル島において1979年6月～1980年1月にかけて実施した調査（「中央カロリン諸島における伝統的航海術の民族学的研究」研究代表者：石森秀三）にもとづいている。

Ⅱ．サタワル島における漁撈と筌漁

1. サタワル島の漁撈

サタワル島の漁撈一般についての調査および報告としては、今世紀の初頭にドイツの探検隊によりおこなわれたもの [DAMM und SARFERT 1935]、第2次大戦前、サタワル島に滞在した土方久功が記載したもの [土方 1941: 310-326]、筆者が1979～1980年にかけておこなった調査報告がある [AKIMICHI 1986: 15-33]。

この間に、漁撈技術上の変化がいくつも生じた。たとえば、筆者の調査時点では、ドイツ時代や土方の報告には登場しない水中眼鏡、ナイロン製の刺網、水中銃、投網などが利用されていたし、ココヤシの枯れ葉をたばねた松明のかわりにカーバイドランプによる夜間の釣り漁がおこなわれていた。その一方、厩上げ漁、毒流し漁、石積み漁のような漁法はおこなわれなくなっていた。

私の調査時点におけるサタワル島の漁撈の概要を、附表1にしめた。ここでは漁撈活動の特徴を以下の5点にわけて指摘しておこう。

(1) サタワル島の人びとが利用する漁場は、島の周囲の海域と、島から数十～百数十 km はなれた海域にある無人島（ウエスト・ファーフ島、ピケロット島）およびサンゴ礁（ウェニキー礁、ファイニカラガップ礁、アユタ礁など）である。

(2) 漁期は、1年を半分ずつにわけた *neerak* と *neefang* という2つの季節に大別される。前者はほぼ4～10月に相当し、時期によっては雨がちで風向は一定しない。海

は一般におだやかである。後者は11～3月で、雨が少なく、東寄りの貿易風が卓越し、海の荒れることが多い季節である [秋道 1980]。

(3) 筆者のしらべた時点で、名称により区別されていた漁法の数はいずれも55であった。そのうち、通年型が約半分の26、それ以外のはとんどのものは *neerak* の季節にのみおこなわれる。漁場別にみた漁法数は、礁原 (*neenéné*)、サンゴ礁の前縁斜面 (*nukunuworkh*)、外洋 (*neemetaw*) の順に少なくなる。

(4) 漁法の数えを、大まかにわけた漁具の種類別に見ると、釣り漁(27)、罟漁(5)、網漁(3)、突き漁(7)、追い込み漁(5)、採集(4)、その他(4) のようになる。このなかで釣り漁の数がもっとも多く、体長 10 cm くらいのスズメダイのような小さな魚から、体長 1 m 以上にも達する外洋性のマグロやサワラまでが対象とされる。

(5) 礁原での漁撈には、貝類、ウニなどの採集活動のほか、タコの突き漁、投網漁、罟漁、ココヤシの葉製ロープをもちいた追い込み漁などがある。リーフの前縁斜面では、もぐりによる魚の突き漁・シャコガイの採集、底釣り漁、罟漁などがおこなわれる。外洋での漁撈には、底釣り漁、流木漁、トビウオの松明漁、カツオ・マグロの引き釣り漁などがふくまれる。

2. サタウル島における罟漁の概要

罟は一般に *wuu* とよばれ、4 種類のものがあつた。そして、罟をもちいた漁法は 7 種類に区別されていた。以下、それぞれの罟の種類とそれをもちいておこなわれる漁法について記述する。

(1) *wuunómw*

nómw は、礁湖 (= ラグーン) をあらわすことばであり、*wuunómw* は「ラグーンの罟」という意味になるが、サタウル島には礁湖がない。しかし、裾礁の内側にある礁原でこの罟をもちいた漁が周年おこなわれる。

wuunómw は、ココヤシの葉柄をこまかくさいたものを手編みにしたかごである。筆者が計測したものによると、形はまんじゅう型で、最大径 22 cm、高さ 12 cm、上部にある漏斗状の魚の

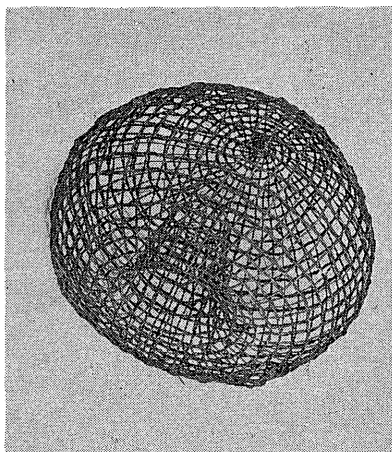


図1 *wuu* (トラック諸島：国立民族学博物館所蔵、標本番号 K987)

入りの直径は 9 cm であった。この笠のなかに砂地にいるカニ (*yárik*) を石でくだいたものをエサとしていれ、浅瀬に放置しておく。少年が単独でこの漁をおこなうことが多い (図 1)。

(2) *wuuniwuwerhik*

wuwerhik というのは、ヒメジ科の魚であるモンツキアカヒメジ (*Mulloidichthys flavolineatus*) をさし、もっぱらこのヒメジをとる漁法が *yówuwerhik* である。この漁法は *neerak* の昼間、礁原の浅瀬でおこなわれる。*neefang* の季節には、この魚はいなくなるといわれている。この笠は、島の海岸に自生するミズガンヒ (*yegiy*: *Pemphis acidula*), *yapwi* (*Clerodendrum inerme*), ベニガクヒルギ (*yong*: *Bruguiera gymnorhiza*), *yawan* (*Ficus tinctoria*) などの枝を、ココヤシ (*núú*: *Cocos nucifera*) 繊維製のロープをもちいて組み立てたもので、上方部がやや丸みをおびた形をしている。典型的なものの長さは 127 cm, 幅 68 cm, 高さ 48 cm であった。

漁法としては、カニ (*yárik*; *rókumw*: *Cardisoma* sp.) を石でくだいてすりつぶし砂をまぜて団子状にする。これをエサとして笠のなかにいれ、礁原のなかの砂地をすこし掘り、笠を設置する。潮がみちてくるとともに、浅瀬へ索餌にやってくるヒメジを何度も場所を変えながらとる。漁はふつう数人でおこなわれる (写真 1)。

(3) *wuunipuyów*

wuunipuyów は、サンゴ礁のリーフの前縁斜面 (*nukunuworh*), あるいはさらに深い



写真 1-a ヒメジをとる *yówuwerhik* 漁

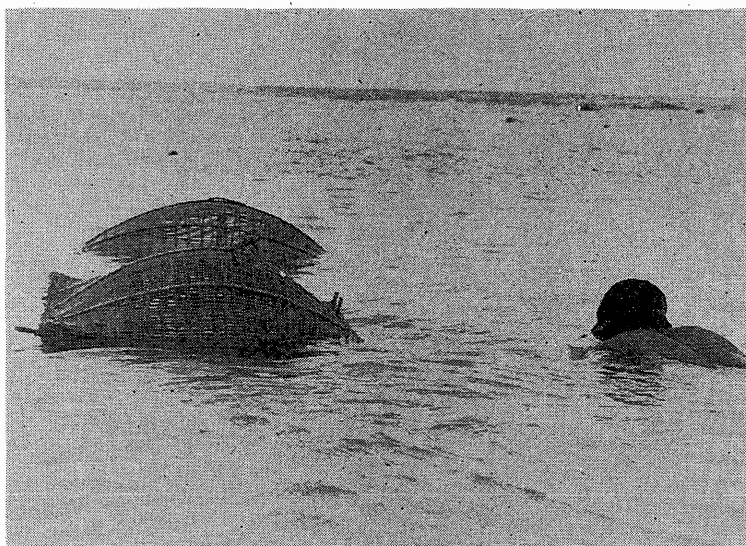


写真 1-b ヒメジをとる *yóuwuwerhik* 漁

海域 (*mesaniworh*) に設置して魚をとるための罟であり、製作にもちいられる木の材料は *wuuniwuwerhik* と同様である (写真 2)。

wuunipuyów をもちいた漁法には、2 つないし 3 つの方法が区別される。第 1 は、波が碎ける部分の外側にあたる水深およそ 5~10 m の海底に 1 日~数日、罟を設置



写真 2 *wuunipuyów* を回収する

する場合で、笠の設置・取りあげは潜水活動によっておこなわれる。漁期としては、潮の流れがなく、海が比較のおだやかな *neerak* の季節におこなわれる。ウォレアイ環礁ではサタウル島とおなじく、潜水活動により笠が引きあげられるが、ルクノール環礁では、笠にロープとうきをつけてあり、潜水はともなわないという [KRÄMER 1935]。ふつう漁は数人の共同作業でおこなわれる。

2 番目の方法では、前述の場合よりさらに深い底が見透せるくらいの深さ (10~20 m) に笠がしずめられる。笠の上方にはサンゴの岩をミズガンヒの枝にくくりつけた鈎 (*fainikée*) をとりつけ、ロープで水面のうきに結ぶ。こうして笠を一昼夜のあいだ海底に放置し、笠を引き上げてなかに入った魚をとる。この漁法では鈎がもちいられる点に特徴があり、とくに *fainikée* とよばれる。この漁は *neerak* の季節のなかでも、とくに 6~8 月の昼間におこなわれる。現在、この漁法はサタウル島ではおこなわれていないが、インフォーマントによると、サタウルの東方にあるプルワット環礁でおこなわれているという。3 番目の方法は、この笠を礁湖内の追い込み漁でもちいる場合であり、これについては次項の b-2 でべる。

(4) *wuunimurowuen*

島でもちいられるもっとも大型の笠で、材質はこれまでのべたものと同じである。サタウル島のものを計測しなかったので、大きさについてはフェイス島のものによると、長さ 255 cm、高さ 95 cm、幅 133 cm であった [KRÄMER 1937: 336]。この笠は、a. 流木漁、b. 礁原での追い込み漁にもちいられ、いずれも多くの人びとが参加しておこなわれる。

a. 流木漁

流木には、小動物、貝類、甲殻類などが付着していることがある。そして、それらの小動物を餌とし、流木を遮蔽場所として利用する大小さまざまな魚類が周囲にすることがある。とくにカツオやマグロなどの魚群が流木にもなっている場合があるので、流木はクジラ付き群、サメ付き群、鳥付き群、あるいは流れ藻などとともに、漁業上、魚群の存在を知る重要な目安とされている [井上 1985: 114-122]。

サタウル島では、流木 (*yapeyipey*) に群れている魚をとる漁法がしられている。流木自体には 24 種類もの名称が区別されている。さらに、流木を島によびよせるため木の葉や枝で模倣的に魚をつくり、それをもちいた儀礼的ないとなみや呪文、流木漁にともなう、食物・ことば・行動上の禁忌もきめこまかにきめられている。島の人びとにとり、流木にたいする関心は非常に高いといえる [土方 1974; 秋道 1984; 石森 1985]。流木漁のことは、*murowuen* とよばれる。流木が接岸すると、大型の笠はカ

ヌーにつんではこばれ、ヤシロープで流木の下側にむすびつけられる。さらに、流木
の他端をカヌーにむすびつけてこれを引っ張ると、驚いた魚が釜のなかに追い込まれ
る。一方、釜にはいない魚や大型の魚は、小型のカヌーに分乗した男たちがおこな
う釣り漁によって漁獲される。このようにして、流木漁により一度に大量の魚が漁獲
される。

b. 礁湖内での追い込み漁

b-1. *roop, serek*

wuunimurouwen は、礁原における追い込み漁にもちいられる。あらかじめ設置し
た釜の両端から、ココヤシの葉でつくったロープを数十mから数百mの長さにつなぎ
あわせてV字形ないし馬蹄形にひろげ、多人数の人間がこのロープをだんだんとせば
め、最終的に釜のなかに魚を追い込むという方法である。場合によっては、釜の反対
側からココヤシの葉製ロープをもった人びとが魚を追い込むこともある。前者が *roop*、
後者が *serek* とそれぞれよばれる（写真3, 4）。

b-2. *roorh funuk*

b-1. の方法と類似しているのが *roorh funuk* である。この場合、一方からココヤシ
の葉をつなぎあわせてつくった長いロープを多人数が保持して待機する。他方には、
wuunipuyów や *wuunimurouwen* を一定間隔においてロープに結びつける。ラグーンの
一方からココヤシロープを反対側にむかって移動させ、最終的に魚を他方に設置して



写真3 *roop* 漁でもちいられる大型の釜 (*wuunimurouwen*)

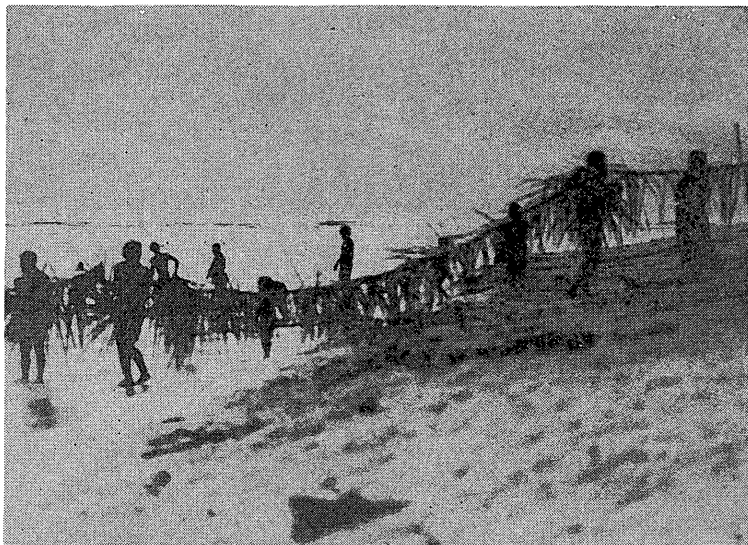


写真4 roop 漁でもちいられるココヤシ葉製のロープ

ある筌のなかに追い込む。いくつもある筌のうち、中央部の筌は *wuunikap* と称される。この漁は *neerak* の季節におこなわれる。

以上の記述からあきらかなように、筌漁は、礁原、礁湖、サンゴ礁前縁斜面、外洋といったサンゴ礁海域の地形区分に応じてたくみにおこなわれている。筌漁でとれた魚は、もちろんびとの食糧として利用される。ただし、もちいられた筌の種類や漁獲量に応じて、利用の仕方が異なっている。*wuunómw* でとれる魚は小さく、この筌漁をおこなう少年たちにより消費される場合がほとんどである。*yówuwerhik* や *wuuni-puyów* の場合、漁撈活動は数人単位でおこなわれる。とれた魚は筌の所有者、カヌーを使って海に出るため、そのさいのカヌーの所有者、それ以外の参加者のあいだで分配される場合が多い。*wuunimurouwen* をもちいた外洋での *murouwen* 漁や、礁原での *roop* 漁には、いずれも多くの人間が参加するうえ、一度に多くの魚がとれるので、漁獲物は島中の成員にゆきわたるように分配がおこなわれる。さらに *yówuwerhik* の場合のように、漁獲されたヒメジが、食糧としてではなく底釣り漁用のエサとして利用されることもある。

Ⅲ. ミクロネシアの筌漁とその分布

サタワル島は、ミクロネシアのほぼ中央に位置する隆起サンゴ礁島である。島にお

ける笠漁は、ミクロネシアの他地域においてどのように分布しているのだろうか。サタワル島にはない別種類の笠がもちいられているのだろうか。本節では、ミクロネシアにおける笠や笠漁の分布を、文献を中心とした資料をもとに、笠漁具の名称や形などに着目して検討してみよう。

1. 笠漁具の分布

(1) 笠漁具の一般名称

ミクロネシア地域で笠を一般にあらわす名称をみると、中央カロリン諸島においては、*u* (*wu*) という名称がウォレアイ環礁以東、トラック諸島までひろがっている [QUACKENBUSH 1968: 187; GOODENOUGH and SUGITA 1980]。さらに東にいくと、ポナペ島で *uh* [REHG and SOHL 1979]、コシャエ島で *u* [LEE 1976]、マーシャル諸島やギルバート諸島、エリス諸島においても、笠は *u* (あるいは *ū*) とよばれる [KRÄMER und NEVERMANN 1938; 染木: 1945; KOCH 1961: 35, 1965: 36-38]。ミクロネシアにおける Polynesian Outlier のカビンガマランギ環礁でも笠は *u* とよばれる [染木 1945: 171; BUCK 1950: 251]。

ただし、エリス諸島では、*u* 以外に *faga* という名称がもちいられる [KOCH 1961: 35]。そして、ポリネシアのサモア諸島においても笠は *fanga* とよばれる [BUCK 1933: 446]。

一方、眼をカロリン諸島西部にうつしてみよう。染木は、ソンソロール、トビ、メルルなど、パラオの南西離島において、笠はもちいられていなかったと報告している [染木 1945: 288]。しかし、トビ島には *bieu* とよばれる笠があった [EILERS 1936: 186]。戦後における Quackenbush の報告でも、ソンソロール島、トビ島、メルル島やウリシー環礁で笠のことは *bwejowu* または *bwijoow* とよばれることが指摘されている [QUACKENBUCH 1968: 187]。

以上の点は注意を要する。というのは、*bieu*, *bwejowu* などと同一語源のことばとおもわれるサタワル島の *puyów* という名称は、笠全体ではなくあるタイプの笠をあらわしているにすぎないからである。やはり戦後にトビ島で調査をおこなった Black が記載している笠、*biyeu* は、サタワル島でいう *puyów* と同型式のものとおもわれる。しかも *biyeu* は日本時代以前から使用されていたという [BLACK n.d.: 58-59]。これらの地域では、サタワル島における *puyów* 型の笠だけがもちいられていた可能性がある。

ヤップ諸島において、笠を包括する名称は、*yenup* (あるいは *yanup*) である [Mü-

LLER 1917; JENSEN 1977]。また、杉浦もヤップで竹製箱型の笠は一般に *junup* とよばれるとしている [杉浦 1942: 64]。一方、柴木によると、ヤップの笠は一般に *marouru* とよばれ、とくに竹製のものは *ingap* と称されるとしている [柴木 1945: 345]。パラオ諸島では、笠のことは *buub* と総称され、すくなくとも15種類の笠が区別されていた [KRÄMER 1926]。この *yanup* は *ya-n*, *u-*, *p* からなり、もともとの語形は *u-* である。またパラオの *buub* も、言語的に中央カロリン諸島の *wuu* (あるいは *u*) と同系統に属する [崎山 1988]。

以上の点から、ミクロネシアにおいては笠をあらわす *wuu* や *u* という一般名称が、西のパラオ諸島、ヤップ諸島から東のマーシャル諸島、ギルバート諸島、エリス諸島にいたる非常にひろい領域にわたって分布していることがわかる。

(2) 笠の種類別分布

つぎに、笠の種類ごとの名称を手がかりとして、地理的なひろがりを検討してみよう。サタワル島における調査から、笠には大きくわけて4つの種類があることがあらかじめわかっている。これらと同系統の名称をもつ笠は、サタワル島とおなじカロリン語を共有する他の島じまでもみることができる。文献を中心としてしらべた結果、ミクロネシアのひろい範囲にわたり同様な笠が存在することがわかった。以下、4種類の笠ごとの名称を手がかりにそれぞれの分布にわけのべる (表1~4)。

wuunómw: Damm と Sarfert によると、*wuunómw* と同系統の名称をもつ笠は西カロリン諸島ではしられておらず、サタワル島以東でのみ見られるという [DAMM und SARFERT 1935: 53]。しかし、Krämer はサタワル島の西側にあるラモトレック環礁でもこの笠があることを認めている [KRÄMER 1937: 60-62]。さらに西にあるウリシー環礁のモグモグ島でも、*ulam* がもちいられていた [KRÄMER 1938: 312]。

ここで問題となるのが、ヤップ諸島における笠の記載である。杉浦によると、*nonom* という笠がヤップにあり、中央カロリンやトラック諸島のものと構造が同じであるとしている。また、Müller は、杉浦以前に調査をおこない、ヤップのガギル地区のみで *sonom* という名称の笠がもちいられていることを記載しており、この笠が中央カロリン諸島からもたらされたものと考えている。ただし、問題となる笠自体は、中央カロリン諸島におけるものよりずいぶんと大型で径が 1.64 m、高さが 59 cm もある。しかも、コウイカの身をエサとすること、石の重りをつけて深い海底に沈め、ロープで引き上げる方法がとられるという点で中央カロリン諸島のものとは顕著に異なっている [MÜLLER 1917: 77]。以上の点から、中央カロリン諸島からヤップ諸

表1 ミクロネシアにおける笙の分布—I. *wuunómw* 型

島 名	笙 の 名 称
ヤップ	<i>sonom</i> [MÜLLER 1917: 77], <i>nonom</i> [杉浦 1942: 64]
ウリシー (モグモグ)	<i>ulam</i> [DAMM 1938: 312]
フェイス	<i>ulam</i> [KRÄMER 1937: 336]
ラモトレック	<i>ulam</i> [KRÄMER 1937: 62]
サタワル	<i>ulam</i> [DAMM und SARFERT 1935: 53], ウー [土方 1941: 310-326], <i>wuunómw</i> [AKIMICHI 1986]
プルワット	<i>unam</i> [DAMM und SARFERT 1935: 53]
ブルスク	<i>wunam</i> [DAMM und SARFERT 1935: 53]
トラック (ロモヌム)	<i>unom</i> [LeBAR 1964]
ナモヌック	<i>u'n unóm</i> [KRÄMER 1935: 55]
ナモヌイト	<i>u nám</i> [KRÄMER 1935: 222]

島へもたらされたと考えられるものを別とすれば, *wuunómw* は, ラモトレック環礁以東, ナモヌック環礁まで分布しているといえる (表1)。

wuuniwuwerhik: Damm と Sarfert によると, *wuwerhik* をとる笙は, ラモトレック, イファルク, ウォレアイなどの環礁島からプルワット環礁周辺の島じまにみられ, サタワル島やトラック諸島にはないであろうとしている [DAMM und SARFERT 1937: 54-55]。筆者の調査時点ではサタワル島にもこの笙がしられていた。しかし, 島のインフォーマントによるとこの笙はもともとプルワット環礁からもたらされたもので, それ以前にはなかったという。

一方, サタワル島以西にあるラモトレック環礁, イファルク環礁では, おなじ形態とおもわれる笙にたいして, *wuuni pam* とか *ulubam* という名称がもちいられる。この *pam* あるいは *bam* というのは, *rakum* というカニのエサ (*pa*) をさす。ファララップ島でも *ulipam* という笙がしられている [DAMM 1938: 166]。サタワル島は, 名称の分布からすると, ちょうど *wuunipam* と *wuuniwuwerhik* の境界にあたっている

 表2 ミクロネシアにおける笙の分布—II. *wuuniwuwerhik* 型

島 名	笙 の 名 称
イファルク	<i>ulubam</i> [DAMM 1938: 27-32], <i>ul pam</i> [BURROWS and SPIRO 1953: 83]
ウォレアイ	<i>ulepam</i> [KRÄMER 1937: 235]
ファララップ	<i>ulipam</i> [DAMM 1938: 166]
ラモトレック	<i>u le pam</i> [KRÄMER 1937: 62]
サタワル	<i>wuuniwuwerhik</i>
プルワット	<i>unuwolik</i> [DAMM und SARFERT 1935: 54-55]

ことになる (表2)。

また、西カロリン諸島のパラオ諸島では、ヒメジをとるための筌 *bub el dech* がしられている [KRÄMER 1926]。しかも、この *dech* という魚は、サタウル島における *wuwerhik* と同一種類のモンツキアカヒメジである [HELFMAN and RANDALL 1973: 147; MASSE 1986: 91]。

wuunipuyów: *wuunipuyów* という名称の分布はひろい。前述したように、ソンソロール島からフェイス島にいたる島じまでは、筌自体は *buyeeu*, ないし *bwijoow* と称される。ウォレアイ環礁では *ulebiau*, ラモトレック環礁では, *bio* [DAMM und SARFERT 1935: 54], *u lepio* または *u le fato* [KRÄMER 1937: 60–62] とそれぞれよばれる。*bio*, *pio* は *puyów* と同一語源のことばであるとおもわれるが, *fato* については不明である。さらに、サタウル島やプルワット環礁におけるかつての報告では、ともに *ulubau* とよばれる筌があった [DAMM und SARFERT 1935: 54]。さらに東のトラック諸島にあるロモヌム島にも *unupweeu* とよばれる筌があった。LeBar によると、トラック諸島の筌は、もともとモートロック諸島で専門につくられたもので、トラック諸島民が製作方法と使用方法を学んだとされている (表3)。

wuunipuyów 型の筌で、鉤を使うものはプルワット環礁やサタウル島で *unifaigo* とよばれる。この方法による筌漁はプルワット環礁周辺でのみ見られ、トラック諸島にはないとされている [DAMM und SARFERT 1935: 54]。この *faigo* は, *fainikée* のことをさす。

表3 ミクロネシアにおける筌の分布——III. *wuunipuyów* 型

島 名	筌 の 名 称
ソンソロール	<i>bwejowu</i> [QUACKENBUSH 1968]
ト ビ	<i>bwejowu</i> [QUACKENBUSH 1968], <i>bieu</i> [EILERS 1936: 186], <i>biyeu</i> [BLACK n.d.: 58–59]
ウリシー	<i>bwijoow</i> [QUACKENBUSH 1968]
モグモグ	<i>bwijoow</i> [QUACKENBUSH 1968]
フェイス	<i>ulebiau</i> [KRÄMER 1937: 336]
ウォレアイ	<i>ulebiou</i> [KRÄMER 1937: 235]
ラモトレック	<i>u lepio</i> または <i>u le fato</i> [KRÄMER 1937: 60–62], <i>bio</i> [DAMM und SARFERT 1935: 54]
サタウル	<i>ulubau</i> [DAMM und SARFERT 1935: 54], <i>wuunipuyów</i> [AKIMICHI 1986]
プルワット	<i>ulubau</i> [DAMM und SARFERT 1935: 54]
トラック (ロモヌム)	<i>unupweeu</i> [LEBAR 1964]
マーシャル	<i>u</i> [KRÄMER und NEVERMANN 1938]
ギルバート	<i>faga</i> [KOCH 1961]

表 4 ミクロネシアにおける筥の分布——IV. *wuunimurouwen* 型

島 名	筥 の 名 称
フェイス	<i>ulimorouel</i> [KRÄMER 1937: 336]
ソロル	<i>ulimerouwoli</i> [DAMM et al. 1938: 31], <i>merouol</i> [DAMM 1938: 240]
イファルク	<i>ulimerouwoli</i> [DAMM et al. 1938: 27–32], <i>ul meroua</i> または <i>merouel</i> [BURROWS and SPIRO 1953: 83]
ウォレアイ	<i>ulemoroual (morouel)</i> [KRÄMER 1937]
ファララップ	<i>ule mouroued</i> [DAMM 1938: 166]
ラモトレック	<i>ul marauel (morouel)</i> [KRÄMER 1937: 60–62]
サタワル	<i>ulumerouel</i> [DAMM und SARFERT 1935: 54], <i>wuunikeraw</i> または <i>wuunimurouwen</i>
プルワット	<i>unugadjau</i> [DAMM und SARFERT 1935: 54]

wuunimurouwen: この名称をもつ筥は、サタワル島以西、ラモトレック環礁、イファルク環礁、ファララップ環礁、ソロル島をへて、フェイス島にいたるまでの範囲にみられる (表 4)。また、サタワル島でこの筥は別名で *wuunikeraw* とよばれる。サタワル島の約 300 km 東方にあるプルワット環礁でも、*unugadjau* とよばれる流木漁用の筥がある [DAMM und SARFERT 1935: 54]。

この *keraw* や *gadjau* は、東カロリン諸島にあるコシャエ島のカロリン語名であるとされてきた。とすると、*wuunimurouwen* は、プルワット環礁より東のコシャエ島まで分布域がひろがることになるが、その中間にある島じまでは報告例がない。また、最近 Goodenough は、この *keraw* はコシャエ島をさすのではなく、「高い島」をあらわすことばであるという説を提唱している [GOODENOUGH 1986: 551–568]。すると、サタワル島の筥は、コシャエ島ではなく、トラック諸島からもたらされた可能性があることになる。

以上のように、筥漁具をあらわす名称の分布を検討した結果、筥漁がミクロネシア地域でひろくおこなわれていることはあきらかである。しかし 4 種類の筥を個別に検討してみると、それぞれの筥の分布はかならずしも一致しない。すなわち、*wuunómw* と *wuunipuyów* の筥がミクロネシアの全域にわたってひろい分布をしめすのになんて、*wuuniwuwerhik* と *wuunimurouwen* が、中央カロリン諸島を中心とした地域にほかぎられている点は対照的である。

2. 筥漁具の形態と材質

(1) 筥の形態

図 2 は、ミクロネシアおよび周辺地域におけるさまざまな筥の記述や図、あるいは

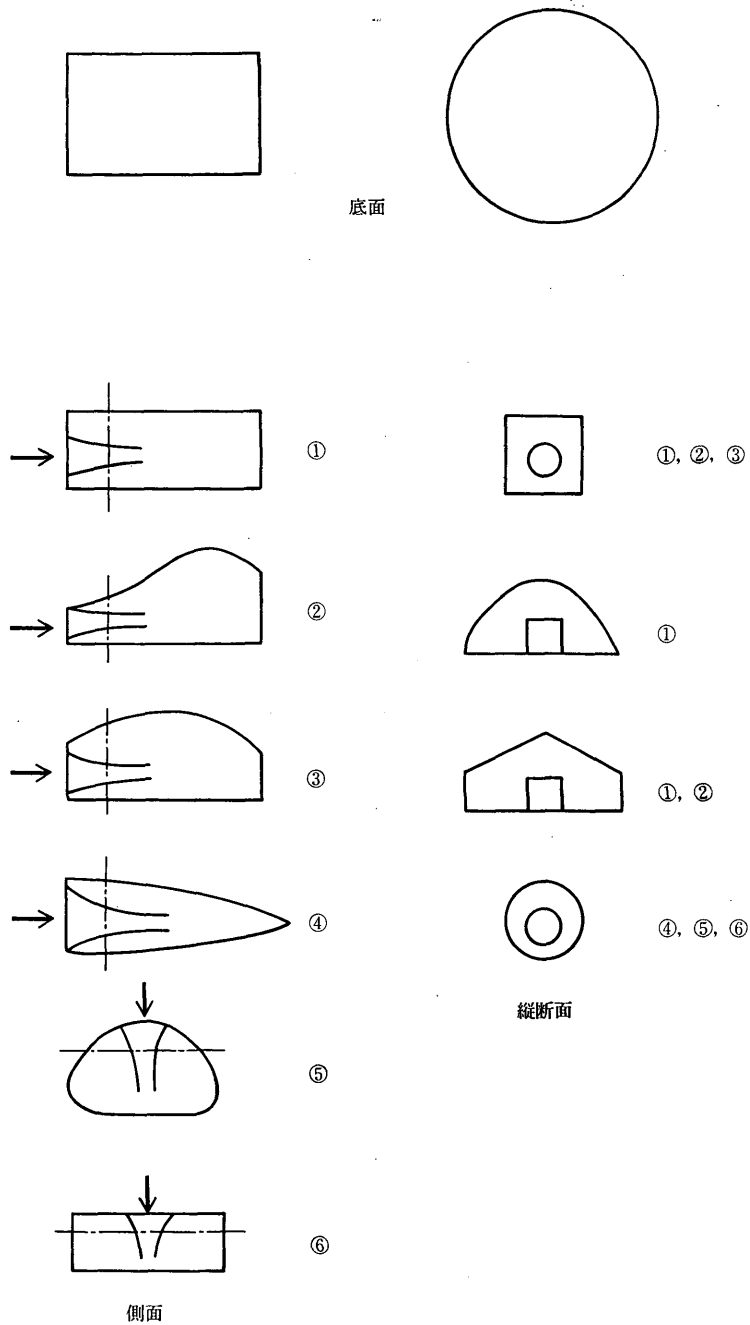


図2 ミクロネシアにおける笠の型式（模式図）
矢印→は、魚のはいり口を示す。

写真などから、基本的とおもわれる笥の形態を模式的にあらわしたものである。ごく大ざっぱに見ると、ミクロネシアにおける笥は、図にしめたように、底面が円形のものと同方形のものに区別することができる。

底面が円形のものには、さらに2つのタイプがある。1つはサタウル島やトラック諸島の *wuunómw*, あるいはヤップ諸島の *sonom* におけるように、まんじゅう型で上部に魚がはいる入り口があるものである。類似の形をした笥は、ポリネシアのニュージーランド・マオリ族やクック諸島民のもの [BEST 1977; BUCK 1944], 日本のトカラ列島のもの (国立民族学博物館所蔵標本番号 19633: 鹿児島県大島郡喜界島), 沖縄の石垣島におけるティールなどにそれぞれみつけることができる。大きさの点でいうと、最大径は 20 cm くらいから 1.5 m 以上に達するものまでである。

もう1つは、横むけにして設置するタイプの笥で、形は釣り鐘型から、とっくり型、円筒型、筒型までをふくめたものまでである。開口部は釣り鐘や円筒の底にあたる。この種の笥はパラオ諸島にみられるほか [KRÄMER 1926], プルワット環礁およびサタウル島で *faisil* とよばれる笥や、ナモルック島でパロロ (*palolo*) をとる笥 [KRÄMER 1935: 53] などにあたるが、ミクロネシアでは一般的にすくない。むしろ、こうした笥はポリネシアのサモア諸島、クック諸島で見られる。

一方、底面が方形の笥には多くの形態上の変異がある。全体の形が直方体 (ギルバート諸島), 家型 (プルワット環礁), かまぼこ型 (ヤップ諸島, パラオ諸島), 屋根の部分がわん曲しているもの (プルワット環礁, ウォレアイ環礁), 入り口が凹型のものとさまざまである (図2)。

松岡によると、マーシャル、ポナペなどの東カロリン諸島では、箱形の笥があるのにたいして、サイパン、パラオなどでは、箱形のものに加えて魚の入り口にあたる部分を引っ込めてあるものが見られる [松岡 1927: 746-747]。

(2) 笥の材質

笥にもちいられる植物は、笥の種類によって異なっている。サタウル島以外の地域における資料をみると、笥の形によってもちいられる材質にちがいがあることがわかる。

たとえば、底面が円形の笥の場合、組み立てるというより、編みあげるといった作業を必要とする。もちいられる材料にしても、ココヤシの葉柄 (サタウル島), 湿地にはえる丈夫な草 (トラック諸島のロモヌム) [LeBar 1964], イチビ科の蔓 (サモア諸島), パンダナスの繊維 (プルワット環礁, サタウル島) [DAMM und SARFERT 1935] などのように、やわらかい性質のものもちいられる。

一方、底面が方形の筓にたいしては、枝を使って箱を組み立てる必要がある。ただし、かならずしも全体の形が直方体であるとはかぎらず、弾力性にとむことも要求される。この種の筓の材料としては、オオフトモモ (*Eugenia javanica*) とココヤシの根 (トビ島) [BLACK n.d.: 58], 竹 (ヤップ諸島), マングローブの気根や木の皮をはいだもの (トラック諸島), *Tiakahal* という木 (カピングマランギ環礁), 鉄木 (マーシャル諸島), ミズガンヒ (*gie*: 前述) (ギルバート諸島), パンダナスの幹 (プルワット環礁) といった報告がある。

とくに筆者が重要と思うのは、海水中で筓を設置することによる筓の腐食・消耗の問題である。こうした点で、耐塩性のある植物が多く利用されていることは注目してよい。たとえば、*Pemphis* は、海浜に自生する灌木で、満潮時に植物体が冠水することもある。耐塩性があるので、海水中における使用には適切であるとおもわれる [MOORE and McMAKIN 1979: 117]。また、台風や津波の影響で、海拔高度の低い島じまが冠水して、海浜の植生が攪乱ないし破壊されることがある。こうした場合にもとくに *Pemphis* はよく生育するとされている。ウリシー環礁やイファルク環礁でも、この植物を *weir basket* 用に利用するという [LESSA 1977: 168]。このほか、マングローブやパンダナスなどの海浜植物の利用も顕著である。ただし、ヤップ島だけは、島に自生する竹が筓の製作材料として多くもちいられるという点が、他の島じまの場合と顕著に異なっている。

このほか、だれでもが筓を製作できるとはかぎらないという技術的制約や、使用中、波に流されたり、破損する恐れが多分にある。筓を長期的に使用していくために、その都度、外側の枠組を部分的に取り替える作業もおこなわれる。

IV. 筓漁の生態学

1. 筓漁の季節性と民俗知識

筓漁は、周年おこなわれるのではない。とりわけ、魚の季節的な出現が漁期をきめる重要な要因となっている。サタワル島の調査によると、魚の季節的な来遊は、「嵐の星」の出現にともなう自然現象の変化としてとらえられていた。たとえば、*wuuniwuwerhik* の対象となる *wuwerhik* は、こと座 (*méen*) が夜明け前、北東の空から出現する時期に島の西方より接岸し、多くとれるとされ、この魚のことは *wuwerhikin woonméén* とよばれる。*wuunimuwouen* の対象となる流木の接岸も季節的である。つまり、特定の嵐がさったあとにおとずれるなぎ (*nuwa*) の時期と対応している [秋道

1980: 3-51]。

こうした経験的な民俗知識がどの程度じっさいにあてはまるのかについての科学的証明を別としても、筌漁が魚の季節的な来遊に対応しておこなわれると考えてよいだろう。

一方で人びとは、魚の来遊をひたすらまっていただけではなく、超自然界へ働きかけることによって、魚や流木を島にもたらそうとした。それが一般に *kkoto yiik* とよばれる魚をよぶための儀礼である。その内容は上述の既発表論文にくわしくのべたのでここでくりかえさないが、ここでは自然の（不安定な）サイクルに人為的に介入し、そのサイクルをより安定化させる儀礼的なところみがなされていたことを記憶にとどめておこう。

2. 筌漁の魚種・漁獲尾数

1979年6月から12月末までの期間におこなわれた筌漁の種類は、*wuunipuyów*（6～7月）と *yówuwerhik*（7～9月）であった。ここでは、筆者の滞在中おこなわれた筌漁の記録をもとに、とれた魚の種類や尾数についてまとめた結果をのべる（附表2参照）。

(1) *yówuwerhik* 漁

1979年8月1日～25日までのあいだに、漁がおこなわれたのは7日間であった。筌漁をおこなったグループは、2組にすぎない。表5にしめしたように1日のうちで筌を設置する場所が何度か移動させられている。この漁では、*wuwerhik* のみしか漁獲

表5 筌漁の漁獲尾数・魚種の記録 (*yówuwerhik* 漁)

1979年 月 日	ヒメジの 漁獲尾数	筌の設置 回数	時 間 (30分単位)	Hrs.	1回あたりの 平均漁獲尾数 (尾/回)
8 1	380	3	1500～1700	2.0	126.7
8 2	270	3	0630～1200	5.5	90.0
8 6	207	2	0800～1400	6.0	103.5
8 7	84	1	1730～	1.5	84.0
8 7	47	1	～1900		47.0
8 8	260	3	0800～1400	6.0	86.7
8 8	170	2	1530～1700	1.5	85.0
8 12	91	2	1500～1700	2.0	45.5
8 25	53	1	0730～	2.5	53.0
8 25	70	1	～1000		70.0
合 計	1632	19			平均85.9尾/回

されていない。1 回あたりのヒメジの平均漁獲尾数は、85.9尾であった。すなわちこのことは、群れをなして遊泳しているヒメジが漁獲された可能性を示唆している。漁に要した時間の計測は、30分きざみのあいまい精度のものであるが、1 回あたりの作業には40分から3 時間を要したことがおおよそわかる。また、イファルク環礁の調査によると、*oerIK* の出現は、11月中旬から12～1 月にかけてとされており、1947年～48 年における観察では、1947年11月14日にラグーンに出現し、翌年の1 月24日まで、漁が断続的におこなわれている [BURROWS and SPIRO 1953]。

(2) *wuunipuyów* 漁

1979年6 月20, 22, 24, 26, 7 月14日の計5 日間における観察記録を表6 にしめし

表6 笠漁の漁獲尾数・魚種の記録 (*wuunipuyów* 漁)

1979年 月 日	笠 番 号 数	漁 獲 尾 数	魚 種 (漁 獲 尾 数)
6 20	01 1	7	ハギ(6), ヒラアジ(1)
	02 1	15	ブダイ(3), ハギ(10), イットウダイ(1), フェダイ(1)
	03 1	62	ヒメジ(3), チョウチョウウオ(2), マツカサウオ(1), ハギ(20), ミヤコテング(2)
6 22	01 1	8	ハギ(6), タカサゴ(1), ブダイ(1)
	02 1	16	ハギ(9), ブダイ(3), タコ(1), ニシキヤッコ(3)
	03 1	29	ハギ(23), ヒメジ(2), ブダイ(2), ベラ(1), タコ(1)
	04 1	25	ハギ(23), ハタ(1), チョウチョウウオ(2)
6 24	01 1	6	ハギ(2), ミヤコテング(2), イットウダイ(1), ブダイ(1)
	02 2	22	ハギ(19), フェフキダイ(1), ブダイ(2)
	03 1	17	ハギ(5), ミヤコテング(7), ハタ(1), イットウダイ(3), ブダイ(1)
	04 1	22	ハギ(16), マツカサウオ(5), ハタ(1)
	1	22	ハギ(13), ミヤコテング(5), ブダイ(3), イットウダイ(1)
	1	14	ハギ(10), ミヤコテング(1), ツノダシ(1), スズメダイ(2)
	05 2	25	ハギ(20), ハタ(2), ブダイ(1), ミヤコテング(2)
6 26	01 1	18	ハギ(7), ミヤコテング(2), マツカサウオ(3), イットウダイ(3), ハタ(1), ブダイ(2)
	02 1	26	ハギ(25), ブダイ(1)
	03 1	23	ハギ(20), ブダイ(1), イットウダイ(1), タコ(1)
	04 1	11	ハギ(9), ブダイ(1), イットウダイ(1)
	05 2	34	ハギ(23), ブダイ(2), イットウダイ(1), ヒメジ(2), ミヤコテング(4), ハタ(2)
	06 1	10	ハギ(6), ミヤコテング(1), ブダイ(2), ハタ(1)
7 14	06 3	29	ハギ(20), ブダイ(2), ハタ(1), ミヤコテング(6)

*：笠の数が複数の場合、それぞれの笠で漁獲された魚種構成は不明。
笠あたりの平均漁獲尾数： $\bar{x}$ =19.6, n=18, S.D.=12.3 (笠が複数の場合を除外)。

た。魚種別にみると、ハギの仲間 (*Acanthurus* spp.) がもっとも多く、5日間分を合計した全体の漁獲尾数441尾のうちの67.1%、ついでミヤコテング (*Naso lituratus*) が13.8%、ブダイの仲間 (*Scaridae*) が6.3%の順になっている。すなわち *Acanthurus* と *Naso* だけで、全体の漁獲尾数のじつに8割を占めていることになる。観察期間が比較的かぎられているものの、他の時期にはおこなわれなかったことからすると、きわめて対象のかぎられた特異な漁法であることになる。ある筥が、特定の魚種を対象とするように設計されていないという考えもある [TINKER 1950: 89-93]。筥ごとの漁獲尾数を見ると、最小6尾、最大は62尾であり、18回の事例中の平均漁獲尾数は、19.6尾であった。グループごとに漁獲量に差があるかどうかは例数がすくないので検定していない (表6)。

wuunómw は、筆者の滞在中、一度もおこなわれなかった。この漁は周年可能であり礁原でおもにおこなわれ、サンゴ礁の浅瀬に棲息する小魚が対象となる。インフォーマントによると、*wuunómw* でとれる魚種として、スズメダイ科 (*tefa, nirek*)、ベラ科 (*yárhiné, senganangan, mwarús*) などの魚があげられていた。土方は、アジェーノエ魚 (*ariilo*, ベラ科に属する小型の魚) のみとれるとしている [土方 1941: 315]。いずれにせよ、*wuunómw* がベラ科の魚をおもにとる漁法であることはほぼまちがいないだろう。

流木漁についても、筆者が滞在中、8月に何度か流木が島の近くにやって来たことがあったが、肝心の魚がともなっておらず、流木漁はおこなわれなかった。しかし、土方によると、島に滞在中、流木漁による大漁踊りが何度も観察されている [土方 1941, 1974]。流木漁で漁獲対象となる魚は、イスズミ (*réén*)、マグロ (*tókuw*)、カツオ (*yárengaap*)、ツムブリ (*foofu*)、モンガラカワハギ (*pwuupw*) などであるが、このうち大型の筥で捕獲されるのは、イスズミ (*Kyphosus* spp.)、モンガラカワハギ (*Rhinecanthus* spp.)、ヒラアジ (*Caranx* spp.) などである。そのほかの魚は、筥に入るのではなく、釣りによって漁獲されることに注意しておこう。

礁原における *roop* 漁は、筆者らが滞在中、1980年6月23日に一度だけおこなわれた。ただしこれは、筆者らを歓迎するための共食会用に大量の魚を準備するためであ

表7 筥漁の漁獲尾数・魚種の記録 (*roop* 漁)

1979年 月 日	総漁獲 尾 数	魚 種 (漁 獲 尾 数)
6 23	78	イスズミ(57), シマハギ(10), ヤガラ(1), ハギ(1), ヒラアジ(1), コノシロの仲間(2)

った。そのさいに漁獲された魚は、表7にあげたように、イスズミ57尾、ついでシマハギが16尾、その他で合計は78尾、全体の漁獲量は、約 15 kg であった(表7)。

roorh funuk の対象魚種は、ヒラアジ (*sarirh*)、ニザダイ (*naguw*)、イスズミ (*réén*)、ハギ (*yengaan*)、シマハギ (*nikéénaw*) などであるという。イフェルク環礁における調査では、1947年の10月6日～1948年1月24日の間に、流木漁は合計で2回おこなわれ、約300尾の漁獲があった [BURROWS and SPIRO 1953]。一方、ラグーン内での *roop* 漁は7回おこなわれている。流木の到来は非常にすくないといわざるをえない。

ここで、*wuunimurouwen* をもちいた漁においては、外洋であるとかリーフ内の浅瀬であるかといった漁場のちがいにかわらず、ヒラアジ、イスズミ、ハギなどの魚が選択的に捕獲されている点に注意しておこう。

3. 筌漁の対象特異性

筌漁にかぎらず、漁具・漁法により漁獲される魚種は、程度の差こそあれ特定化されると考えてよいのだろうか。ミクロネシアの島じまにおける筌漁の記載から、それぞれの筌がどのような魚を対象としてもちいられるのかという点を、サタワル島の4種類の筌のわけ方に即して検討してみた。

(1) *wuunómw* 型

wuunómw 型の筌によって捕獲の対象とされる魚種は、ナモヌック島とウリシー環礁の場合だけ記載がある。すなわち、前者では *ameirer* (筆者註：サタワル島の *yamarhiyor* で *Cephalopholis urodelus*) が、後者では *mecal* という名称の魚が捕獲される [KRÄMER 1935: 55]。

(2) *wuuniwuerhik* 型

wuuniwuerhik 型の筌で対象とされるのは、*uorik* (ラモトレック環礁)、*oerIK* (イフェルク環礁)、現地名不明のヒメジ、ブダイ (イフェルク環礁) である。この *uorik* と *oerIK* は、サタワル語の *wuwerhik* と同一のものである。ちなみに、ウォレアイ環礁では *uweshig* [SOHN and TAWERILMANG 1976]、プルワット環礁でも *wuwerik* [ELBERT 1972] とよばれる。パラオにおける *bub el dech* という筌は、*dech*、すなわち *wuwerhik* をとるものである。このように、モンツキアカヒメジを特異的にとる筌漁がミクロネシアでひろくおこなわれていることは注目してよいだろう。また、*wuwerhik* をとる漁法においては、*lagum*, *ragum*, *rakum* とよばれるカニをすりつぶして餌としてもちいるという記載が共通してある。これらはいずれもサタワル島における *rókumw*、すなわちオカガニ (*Cardisoma* sp.) をさしているとおもわれる。

(3) *wuunipuyów* 型

wuunipuyów 型の筌によって捕獲される魚についての記載は少ない。サタワル島の調査では、*Acanthurus* と *Naso* が圧倒的に多く漁獲されている。

筌自体の名称は異なるが、海底に筌を設置して魚をとるタイプのものは、東ミクロネシアにもみられる。マーシャル諸島では、魚卵のついた石をエサとして *egomudj*, *moromor* という魚をとるとか、カピンガマランギ環礁では、小魚を餌として、*Ti kihia*, *Ti kihia ugiriau*, *Ti kihia keen* という3種の海鰻をとるといった記述がある。一方、ギルバート諸島では、あらゆる種類の魚がとれるという。

(4) *wuunimurowuen* 型

wuunimurowuen 型の筌によって捕獲されるという記載があるのは、*rali*, *rel*, *fofo* (いずれもイファルク環礁), *rell* (ラモトレック環礁) などである。*rali*, *rel*, *rell* などはサタワル語における *réén* すなわちイスズミ (*Kyphosus* spp.) に相当する。*fofo* は、サタワル語における *fofo*, すなわちツムブリ (*Elagatis bipinnulatus*) である。いずれも、流木によく付く魚である。しかし、ツムブリが筌に入るかどうかはイファルクの記述からは判断できない。むしろ、流木漁では圧倒的にイスズミがとられている点に注意しておこう。

V. まとめと今後の課題

1. 筌漁と島嶼環境条件

これまでの記載から、ミクロネシアにおける筌漁について整理すると、以下のような類型が可能である。

第1は、礁原、あるいは礁湖（ラグーン）の浅瀬でおこなわれるもので、*wuunómw* や *wuuniwuwerhik* をもちいた小規模な筌漁や、*wuunipuyów* ないし *wuunimurowuen* をもちいておこなわれる集団的な筌漁がふくまれる。とくに後者においては、島中の老若男女が参加しておこなわれることが多い。浅瀬の利用は、女性や子供の参加を可能にしている。いずれも、潜水活動をまったくともなわないか、あったとしても数メートルの深さにかぎられる場合である。これを浅瀬型とよぼう。

第2は、サンゴ礁の前縁部斜面に *wuunipuyów* を海底に沈めておこなわれる筌漁である。サタワル島にはラグーンがないので、この筌漁はリーフの外側でおこなわれるが、広大なラグーンをもつ環礁島では、リーフの外側ではなくラグーンの深みにおいておこなわれる。筌の設置や魚の回収のさいには、潜水活動によるか、もしくは鉤を

もちいて水中から引き上げる必要がある。いずれも、男性がおこなう筌漁である。そこで、これを海底型とよぶことにしよう。

第3は、外洋において流木に付随して群れをなしている魚をとるもので、*wuuni-murowuen* がもちいられる。これはまさしく外洋型とでもよべるものであり、水面に浮かぶ流木に筌を結びつけて漁をおこなう点に大きな特徴がある。カヌーによる漁撈には女性の参加はみられない。したがってこの場合も、男性のみが活動に参加することになる。

以上のように、ミクロネシアにおける筌漁は、サンゴ礁海域の地形的な条件から、浅瀬、リーフ内外の海底、外洋の表層といった顕著に異なる領域が利用されていることが特徴である。さらに、少しずつ形のちがった筌がもちいられたり、おなじ形の筌であっても、他の網漁具とくみあわせてもちいられることがある。

2. 生態学的な問題

ミクロネシアの筌漁をめぐる生態学的な問題を提起しておこう。

まず、サタワル島の筌漁で漁獲された魚の種類が非常に偏っているということをもどように評価できるのだろうか。まず、対象である魚自体の出現頻度が場所や季節によって偏りがあるという場合である。筆者は沖縄の糸満やソロモン諸島のマライタ島で、サンゴ礁海域の微小な地形的条件のちがいによって、網漁によって漁獲される魚がちがうことを漁民が熟知していることを指摘した [AKIMICHI 1978, 1984]。しかし、サタワル島の事例が、筌を設置する場所の微小なちがいによるのかどうかはじつのところ不明である。

これまでみてきたように、筌漁のうち、*wuuniwuwerhik* がもっとも対象への高い選択性をもつものであり、さらに *wuunipuyów* や *wuunimurowuen* でさえ、それぞれ *Acanthurus* と *Kyphosus* という特定の魚種との強い結びつきが見られた。*wuunómw* の場合でも、*Thalassoma* が中心に漁獲される。筌は、特定魚種をとるためにデザインされたものでないとする意見もあるが [TINKER 1950]、筌漁にも釣り漁のように対象への特異的な選択性があるのではないか。このことは魚の側のどのような条件をさしているものだろうか。1つは同一種類の魚が群れをなしているという点であり、もう1つは、魚の形、ないし大きさである。図3に示したように、ヒメジのような細長い魚と、イスズミやハギのように平たい形をした魚は同一の筌にはいることはないのではないだろうか。この点をより明確にするためには、今後、とくに筌の入口の形や構造の部分と魚の体形との関係についての考察が重要とおもわれる。

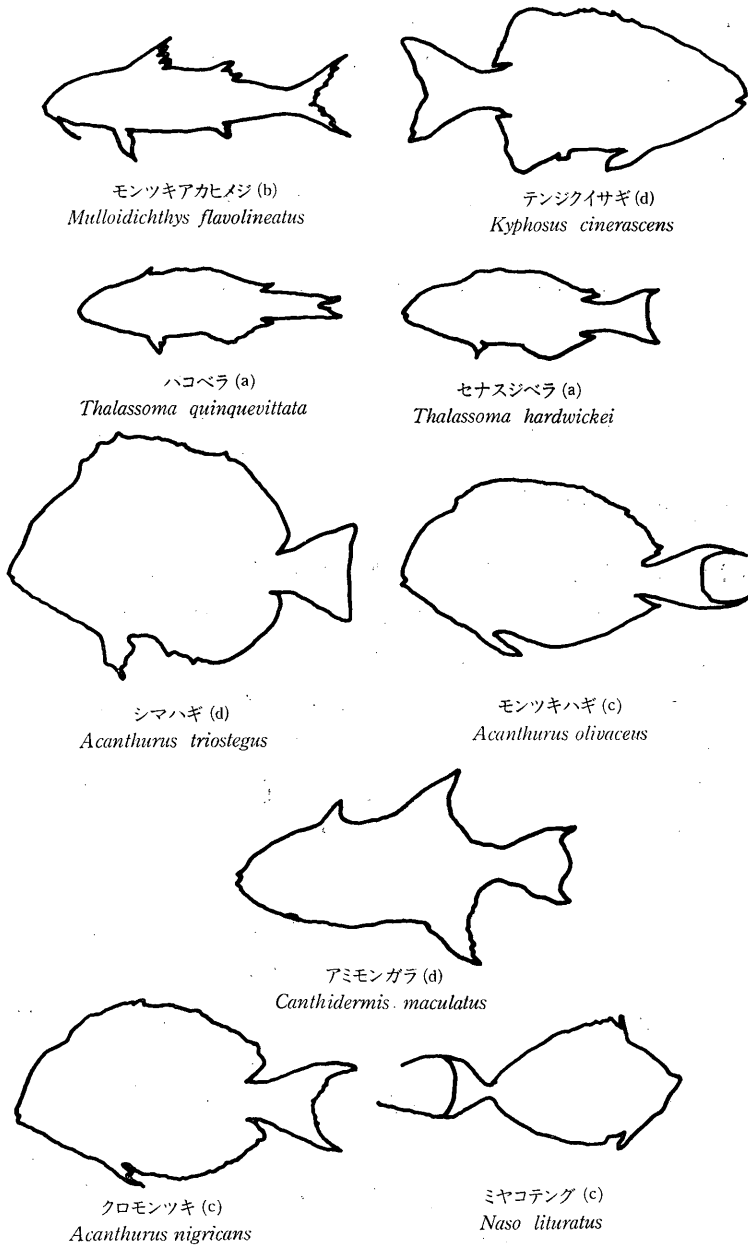


図 3 サタクル島の筌漁による主要な漁獲魚種

(a) *wuunómw*, (b) *wuuniwuwerrhik*, (c) *wuunipuyów*, (d) *wuunimuroowuen*
によりそれぞれ漁獲される

また、筌漁と網漁ないしえり、石積み漁との関係についてふれておこう。サタワル島における例からあきらかなように、おなじ筌漁でも、筌漁具だけをもちいて漁がおこなわれる場合と、ほかの漁具ないしは漁法と組み合わせておこなわれる場合があった。

ヤップ諸島のえり漁、石積み漁では、構造物の最奥部に筌が半永久的に設置されることがある。また、サタワル島の *roop* 漁におけるように、網の最奥部、いわば袋網にあたる部分にも、大型の筌がもちいられることがある。

魚を威嚇ないし誘導して、最終的に捕獲する漁法においても、ラグーンのなかの適当な場所に筌だけを設置して魚を漁獲する場合とは性格が異なり、筌は重要な役割をはたす。今後、筌の分布をえりや石積み漁の分布とあわせて検討することにより、オセアニア地域における漁撈の文化史的、あるいは生態学的な研究を進めることができるとおもわれる。

文 献

秋道智彌 (AKIMICHI, Tomoya)

1978 The Ecological Aspect of Lau (Solomon Islands) Ethnoichthyology. *Journal of the Polynesian Society* 87(4): 301-326.

1980 「嵐の星」と自然認識——サタワル島における民族気象学的研究『季刊人類学』11(4): 1-51。

1984 「木の葉になった魚たち——サタワル島における魚の増殖儀礼」『季刊人類学』15(4): 57-100。

1986 Conservation of the Sea, Satawal, Micronesia. In A. Anderson (ed.), *Traditional Fishing in the Pacific*, Pacific Anthropological Records 37, Honolulu: B. P. Bishop Museum, pp. 15-33.

AKIMICHI, Tomoya and Sabino SAUCHOMAL

1982 Satawalese Fish Names. *Micronesica* 18: 1-34.

ANDERSON, Atholl (ed.)

1986 *Traditional Fishing in the Pacific: Ethnographical and Archaeological Papers from the 15th Pacific Science Congress*. Pacific Anthropological Records 37, Honolulu: B. P. Bishop Museum.

ANELL, Bengt

1955 *Contribution to the History of Fishing in the Southern Seas*. Studia Ethnographica Upsaliensia 9, Uppsala: Almqvist and Wiksells. Boktryckeri Ab.

BEST, Elsdon

1977 *Fishing Methods and Devices of the Maori*. Dominion Museum Bulletin 12, Wellington: E. C. Keatina, Government Printer.

BLACK, Peter

n.d. The Fishing Lore of Tobi. Unpublished Manuscript.

BUCK, Peter H. (Te Rangi Hiroa)

1933 *Samoan Material Culture*. B. P. Bishop Museum Bulletin 183, Honolulu: B. P. Bishop Museum.

1950 *Material Culture of Kapingamarangi*. B. P. Bishop Museum Bulletin 200, Honolulu: B. P. Bishop Museum.

- BURROWS, Edwin Grant and Melford E. SPIRO
 1953 *An Atoll Culture: Ethnography of Ifaluk in Central Carolines*. HRAF Behavior Science Monographs, New Haven, Connecticut: HRAF Press.
- 近森 正
 1988 『サンゴ礁の民族考古学——レンネル島の文化と適応』 雄山閣。
- DAMM, Hans
 1938 *Zentralkarolinen*. In G. Thilenius (ed.), *Ergebnisse der Südsee-Expedition 1908-1910*, Band 10-II, Hamburg: Friederichsen, de Gruyter & Co.
- DAMM, Hans und E. SARFERT
 1935 *Inseln um Truk*. In G. Thilenius (ed.), *Ergebnisse der Südsee-Expedition 1908-1910*, Band 6-II, Hamburg: Friederichsen, de Gruyter & Co.
- EILERS, Anneliese
 1934 *Inseln um Ponape*. In G. Thilenius (ed.), *Ergebnisse der Südsee-Expedition 1908-1910*, Band 8, Hamburg: Friederichsen, de Gruyter & Co.
 1936 *Westkarolinen*. In G. Thilenius (ed.), *Ergebnisse der Südsee-Expedition 1908-1910*, Band 9-II, Hamburg: Friederichsen, de Gruyter & Co.
- ELBERT, Samuel H.
 1972 *Puluwat Dictionary*. Pacific Linguistic Series C-24, Canberra: Australian National University.
- FOSBERG, F. R.
 1969 *Plants of Satawal Island, Caroline Islands*. *Atoll Research Bulletin* No. 132, Washington, D.C.: Smithsonian Institution.
- GOODENOUGH, Ward H.
 1986 *Sky World and This World: The Place of Kachaw in Micronesian Cosmology*. *American Anthropologist* 88: 551-568.
- GOODENOUGH, Ward H. and Hiroshi SUGITA
 1980 *Trukese-English Dictionary*. Philadelphia: American Philosophical Society.
- GREEN, Roger, C.
 1976 *Lapita*. In J. D. Jennings (ed.), *The Prehistory of Polynesia*, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, pp. 27-60.
- HELFMAN, Gene S. and John E. RANDALL
 1973 *Palauan Fish Names*. *Pacific Science* 27(2): 136-153.
- 土方久功
 1941 「サタワル島に於ける漁法並に漁魚乃至魚に関する呪儀、禁忌其他」『人類学雑誌』56(6): 310-326。
 1974 『流木——ミクロネシアの孤島にて』 未来社。
 1975 『覆刻 サテワヌ島民話——ミクロネシアの孤島』 アルドウ。
- 井上 実
 1985 『漁具と魚の行動』 恒星社厚生閣。
- 石森秀三
 1985 『危機のコスモロジー——ミクロネシアの神々と人間』 福武書店。
- JENSEN, John T.
 1977 *Yapese-English Dictionary*. Honolulu: University Press of Hawaii.
- JOHANNES, R. E.
 1978 *Words of the Lagoon*. Cambridge: Cambridge University Press.
- KIRCH, P. V. and T. S. DYE
 1979 *Ethno-Archaeology and the Development of Polynesian Fishing Strategies*. *Journal of the Polynesian Society* 88: 53-76.
- KOCH, Gerd
 1961 *The Material Culture of Tuvalu*. Suva: Suva Printing & Publishing Co. Ltd.
 1965 *Materielle Kultur der Gilberts-Inseln*. Berlin: Museum für Völkerkunde Berlin.
- KRÄMER, Augustin F.
 1926 *Yap*. In G. Thilenius (ed.), *Ergebnisse der Südsee-Expedition 1908-1910*, Band 2-II, Hamburg: L. Friederichsen, de Gruyter & Co.
 1935 *Inseln um Truk*. In G. Thilenius (ed.), *Ergebnisse der Südsee-Expedition 1908-1910*,

- Band 6-I, Hamburg: L. Friederichsen, de Gruyter & Co.
- 1937 *Zentralkarolinen*. In G. Thilenius (ed.), *Ergebnisse der Südsee-Expedition 1908-1910*, Band 10-I, Hamburg: L. Friederichsen, de Gruyter & Co.
- 1938 *Zentralkarolinen*. In G. Thilenius (ed.), *Ergebnisse der Südsee-Expedition 1908-1910*, Band 10-II, Hamburg: L. Friederichsen, de Gruyter & Co.
- KRÄMER, Augustin und Hans NEVERMANN
- 1938 *Ralik-Ratak (Marshall-Inseln)*. In G. Thilenius (ed.), *Ergebnisse der Südsee-Expedition 1908-1910*, Band 11, Hamburg: L. Friederichsen, de Gruyter & Co.
- LEBAR, Frank M.
- 1964 *The Material Culture of Truk*. Yale University Publications in Anthropology 68, Department of Anthropology, Yale University.
- LEE, Kee-Dong
- 1976 *Kusaiean-English Dictionary*. Honolulu: University Press of Hawaii.
- LESSA, William A.
- 1977 Traditional Uses of the Vascular Plants of Ulithi Atoll, with Comparative Notes. *Micronesica* 13(2): 129-190.
- LEWIS, David
- 1975 *We, the Navigators*. Honolulu: University Press of Hawaii.
- MASSE, W. B.
- 1986 A Millennium of Fishing in the Palau Islands, Micronesia. In A. Anderson (ed.), *Traditional Fishing in the Pacific*. Pacific Anthropological Records 37, Honolulu: B. P. Bishop Museum, pp. 85-117.
- 松岡静雄
- 1927 『ミクロネシア民族誌』 岡書院。
- MOORE, Philip H. and Patrick D. McMAKIN
- 1979 *Plants of Guam*. University of Guam, College of Agriculture and Life Sciences, Cooperative Extension Service.
- MÜLLER, Wilhelm
- 1917 *Yap*. In G. Thilenius (ed.), *Ergebnisse der Südsee-Expedition 1908-1910*, Band 2-I, Hamburg: L. Friederichsen, de Gruyter & Co.
- QUACKENBUSH, Edward M.
- 1968 *From Sonsorol to Truk: A Dialect Chain*. Ph. D. dissertation, University of Michigan.
- REHG, Kenneth L. and Damian G. SOHL
- 1979 *Ponapean-English Dictionary*. Honolulu: University Press of Hawaii.
- REINMAN, Fred M.
- 1967 *Fishing: An Aspect of Oceanic Economy, An Archaeological Approach*. Fieldiana: Anthropology 56, Chicago: Field Museum of Natural History.
- RIESENBERG, Samuel H.
- 1976 The Organization of Navigational Knowledge on Puluwat. In Ben R. Finney (compiled), *Pacific Navigation and Voyaging*, Polynesian Society Memoir 39, Wellington: The Polynesian Society Inc., pp. 91-128.
- 崎山 理
- 1988 私信。
- 染木 照
- 1945 『ミクロネシアの風土と民具』 彰考書院。
- SOHN, H. and A. F. TAWERILMANG
- 1976 *Woleaian-English Dictionary*. Honolulu: University Press of Hawaii.
- 須藤健一, Sabino SAUCHOMAL
- 1981 「カヌーと航海にまつわる民話——ミクロネシア Satawal 島の伝統的航海術の外延」『国立民族学博物館研究報告』 6(4): 639-766。
- 杉浦健一
- 1942 「ヤップ島民の漁業と漁具」『人類学雑誌』 54(2): 54-65。
- TINKER, Spencer
- 1950 Some Marshall Islands Fish Traps. *Occasional Papers of B. P. Bishop Museum* 20(7): 89-93.

附表1 サタワル島の漁法

	漁 場 I II III	漁 期 R F	時 間 昼 夜	潮 汐 干 満	対 象 魚 種	カヌー使用の有無 (+/-)
1. 突き漁						
<i>tlou</i>	* *	* *	*	*	reef fish	-
<i>tún denki</i>	* *	* *	*	*	reef fish	-
<i>nikappwer</i>	* *	* *	*	* *	reef fish	-
<i>kenas kúús</i>	* *	* *	*	*	reef fish, octopus	-
<i>yakóisak</i>	* *	* *	* *	*	octopus	-
<i>yakókó wong</i>	* *	*	*	* *	turtle	-
<i>tap kúús</i>	*	* *	*	*	octopus	-
2. 底釣り漁						
<i>yasousou</i>	* *	* *	*	*	grouper	-
<i>yaparupar</i>	*	* *	*	*	snapper, squirrelfish	+
<i>yassuw</i>	*	*	*	*	squirrelfish, snapper	+
<i>taikonopwuk</i>		*	*	* *	oilfish	+
<i>faisasa</i>		*	*	*	unicornfish, squirrelfish	+
<i>yaffan pwuupw</i>	*	*	*	*	triggerfish	+
<i>kapaito</i>	* *	* *	*	* *	trevally, squirrelfish	+
<i>wait mwéén</i>	* *	* *	*	*	squirrelfish, trevally	+
<i>wait yetam</i>	* *	*	*	*	trevally	+
<i>mwiyóro</i>	*	* *	*	*	fusilier, triggerfish	+
<i>yóo yakkar</i>	* *	*	*	* *	snapper	+
<i>cehun</i>	*	* *	*	*	snapper	-
<i>yafóitak</i>	*	* *	*	* *	grouper, snapper	-
3. さお釣り漁						
<i>pawó yarhiiné</i>	*	* *	*	*	small grouper	-
<i>pawó mmwas</i>		*	*	*	damselfish	+/-
<i>pawó tefa</i>	*	*	*	*	damselfish	-
<i>pawó nirék</i>	*	*	*	*	damselfish	-
<i>pawó yawukkang</i>	*	* *	*	*	halfbeak	-
<i>pawó cchep</i>	*	* *	* *	*	trevally	-
<i>pawó réén</i>	* *	* *	* *	* *	drummer	-
<i>pawó yániy</i>	*	* *	*	*	grouper	-
<i>pawó yassaf</i>	*	* *	*	*	wrasse, trevally	-
<i>pawóno pwín</i>		*	*	* *	tuna, skipjack	+
4. 引き釣り漁						
<i>nuuk taak</i>	* * *	* *	*	*	needlefish	+
<i>nuuk sangir</i>		*	*	* *	tuna, rainbow runner	+
<i>yaró</i>		*	*	* *	tuna, wahoo	+
<i>nuuk</i>		* *	*	* *	tuna, skipjack	+

秋道 ミクロネシアの笠漁

5. 笠漁						
<i>wuunómw</i>	*	* *	*	*	damselfish	—
<i>wuunipuyów</i>	*	*	*	*	reef fish	+
<i>yówuwerhik</i>	*	* *	*	*	goatfish	—
<i>wuunimurouwen</i>	*	*	*	* *	many species that accompany driftwoods	+
<i>fainikée</i>	*	*	*	* *	snapper, grouper	+
6. 追い込み漁						
<i>roop</i>	* *	*	* *	*	reef fish	—
<i>roorh funuk</i>	*	*	*	*	reef fish	—
<i>serek</i>	*	* *	*	*	reef fish	—
<i>tuu mwocch</i>	*	*	*	*	reef fish	+
<i>yapung</i>	* *	* *	*	*	parrotfish, surgeonfish	—
7. 網漁						
<i>yaporuso</i>	*	*	*	*	goatfish	—
<i>teraiya</i>	*	* *	*	*	goatfish, damselfish	—
<i>pinitawor</i>	*	* *	*	*	mullet, goatfish	—
8. 採集						
<i>tuu nirar</i>	*	*	*	*	sea-urchin	—
<i>pwu yuur</i>	*	*	*	*	lobster	—
<i>yarep wuung</i>	*	*	*	*	shellfish	—
<i>yuufat</i>	*	*	*	* *	clam shell	—
9. その他						
<i>macch</i>	*	*	*	* *	flyingfish	+
<i>tún mengar</i>	*	*	*	* *	flyingfish	+
<i>pak nayew</i>	*	*	*	* *	unicornfish	—
<i>yacchaik</i>	*	*	*	* *	needlefish	+

漁場の I は礁原, II はサンゴ礁の前縁斜面, III は外洋を示す。

漁期の R は *neerak* (4月～10月), F は *neefang* (11月～3月) を示す。

附表2 釜漁により漁獲された魚種

(1) yówuwerhik

サタフル語	和 名	学 名
wuwerhik	モンツキアカヒメジ	<i>Mulloidichthys flavolineatus</i>

(2) wuunipuyów

サタフル語	和 名	学 名
mwocch	ハギの仲間	<i>Acanthurus</i> spp.
mwocchonnakey	メガネクロハギ	<i>Acanthurus glaucopareius</i>
yawuroth	サザナミハギ	<i>Ctenochaetus striatus</i>
nikayingun	ハギの仲間	<i>Acanthuridae</i> sp.
nikeenaw	シマハギ	<i>Acanthurus triostegus</i>
fenaang	ニジハギ	<i>Acanthurus lineatus</i>
pwunukaney	ミヤコテング	<i>Naso lituratus</i> (adult)
pwunaaney	ミヤコテング	<i>Naso lituratus</i> (young)
nikeriker	チョウチョウウオ	<i>Chaetodon</i> spp.
nikasserak	ツノダシ	<i>Zanclus cornutus</i>
kucch	イトウダイ	<i>Flammeo</i> and <i>Adioryx</i> spp.
neet	アオスジエビス	<i>Adioryx tiere</i>
mwéén	マツカサウオ	<i>Myripristis</i> spp.
pwene	バラハタ	<i>Variloa louti</i>
yaniy	ハタの仲間	<i>Epinephelus</i> spp.
yamariyor	ニジハタ	<i>Cephalopholis urodelus</i>
mwanisenus	アオノメハタ	<i>Cephalopholis argus</i>
yikaniworh	ブダイの仲間	<i>Scaridae</i> spp.
kinipwut	ブダイの仲間	<i>Scarus</i> sp.
fasunumat	ナガブダイ	<i>Scarops rubroviolaceus</i> (female)
sepayirh	タイワンブダイ	<i>Calotomus spinidens</i>
móósera	タスキブダイ	<i>Scarus dimidiatus</i>
rowu	アオブダイ	<i>Ypsiscarus ovifrons</i> (male)
mmas	スズメダイの仲間	<i>Abudefduf</i> and <i>Amblyglyphidodon</i> spp.
masamas	ヨコシマクロダイ	<i>Monotaxis grandoculis</i>
yetam	ギンガメアジ	<i>Caranx sexfasciatus</i> (adult)
tiin	タカサゴの仲間	<i>Caesio</i> sp.
yárhengan	クログチニザ	<i>Acanthurus pyroferus</i>

(3) roop

サタフル語	和 名	学 名
réén	イスズミの仲間	<i>Kyphosus</i> spp.
nikéénaw	シマハギ	<i>Acanthurus triostegus</i>
takunnonn	ヤガラ	<i>Fistularia</i> sp.
mwocch	ハギの仲間	<i>Acanthurus</i> spp.
cchep	ギンガメアジ	<i>Caranx sexfasciatus</i> (young)
yengar	コノシロの仲間	<i>Dorosomatidae</i> sp.